

郷 俣

～須木中校歌より～

須木中学校通信 第24号

平成27年12月24日発行 文責 寺原

確かな学力・豊かな心・健やかなからだをもち、
未来をたくましく生き抜く生徒の育成

冬来たりなば 春遠からじ

12月もあと少しで晦日(つもちり)を迎えようとしています。師走とはよく言ったもので、何となく年の瀬を感じる今日この頃です。

4月からここまで、皆さんはいろいろなことに挑戦し、しっかりと取り組んできました。振り返ってみると、君たちが歩んだあとには、大きな成果が「須木中生は・・・だ」という形で残されてきていることに気付いていますか。

これは君たちだけでできたことではありませんが、周りからの指導や応援を皆さんが「恩」としてとらえて、感謝の心をもっていることも、大きな理由の一つだと思います。

ところで、「恩」という字は、因と心からなっていますね。因とははじまりという意味があり、口(ふとん)に人(赤ちゃん)が大の字になつて寝ている様子を表しています。親は生まれてすぐの赤ちゃんを、大事に温かく柔らかい布団に寝かしてあげたいという、優しい心をもっています。これが「親の恩」、つまり『はじめの心』なんです。

学校で先生が教えることは、君たちにとって、ほとんどがはじめてのことですね。だから「恩師」という言葉があるんです。

「はじめて知ったり、はじめてできたり」したとき、人は大きな感動を覚えます。何か新しいことをやり始めようと決心したときも同じですね。でも、人はついこの『はじめの心』を忘れがちです。一人で何でもできるようになったと思いがちです。今の自分があるのは、多くの人の「恩」があったからこそなんです。

恩に報いるために、今私たちにできることは、自分の新しい可能性を探して、決意を新たに進むことではないでしょうか。

元日の朝、君たちがどんな決意をもつか、とても楽しみです。

よい年をお迎え下さい。



＜又吉さんのエッセイより＞

今をときめく「時の人」、芥川賞作家ピースの又吉さんが書いたエッセイです。今の自分は、過去の自分の積み重ねと未来の自分の希望のために存在しており、そのために、自分は今どうあるべきかを自問自答してるような、面白いエッセイだなあと感じ紹介しました。『今』が刹那に『過去』に変わる。だからこそ今を大切にしたい。未来の自分ために。」そんなメッセージが伝わってきますね。中略、後略がありますので、フルに読みたい人は校長先生まで言ってきてください。ちなみに、又吉さんは小さい頃から本の虫だったそうですよ。

将来の幸せ(抜粋)

又吉 直樹

舞台上立つ時、客席の一番後ろに立っている14歳の自分が笑っているかどうかを想像する時がある。(中略)14歳の自分というのは、お笑い芸人になりたいと本気で考えはじめた頃の自分で、いつも真剣にテレビでネタ番組を見ていた。その頃の自分の気持ちを裏切りたくない日々思う。文章を書くときは、19歳の自分を意識する。素晴らしい小説との出会いがたくさんあって救われたのが、19歳の頃だったので、その頃の自分が「面白い」と楽しんでくれるものを書きたいという想いがある。



現在の、35歳の僕は僕だけではなく、過去の自分達がいたことによって存在している。僕の独断で全てを決定していいとは思えない。ただ、全ての責任を今の僕が背負ってはいる。過去の自分に負けぬようにありたいとは、思うが、彼等の声を無視するわけにはいかない。極端な話をすると、今の僕は、生まれてから昨日までの無数の自分自身を引き連れて歩いていることになる。それぞれの自分が、それぞれの要求を僕にしてくる。今、今、今、という一瞬一瞬の積み重ねが僕の人生になっている。もちろん、今の僕が老後の夢を語ることは、将来の自分に対して希望を伝えることでもある。

いつか年老いた僕は、座り心地の良い大きな椅子に腰掛けて古今東西の名作や奇書と呼ばれる小説を、たっぷりと時間をかけて読む。疲れたら本を閉じ、性能の良いスピーカーで好きな音楽を聴きながら、こだわりの珈琲を飲む。(中略)老後にやりたいことを数えだすときりが無い。ただ、乱暴に将来の自分に無理な要求をするのではなく、老後に楽しい時間を過ごすために、今の僕は未来の僕の生活に貢献しなくては行けないと強く思う。自分の人生において世代の断絶があってはならない。年老いた自分は、過去のあらゆる年代の自分を引き連れ、それぞれの世代の僕の希望に耳を傾けながらも追い詰められることなく笑顔でいてもらいたいと願う。

あらゆる夢が実現する瞬間を将来目撃する、老いた日の自分のために、今の僕ができることはなにがあるのだろう。今の僕が、かつての僕自身の声に耳を傾ける一方で、今の僕は未来の僕の手助けをしなくては行けない。(後略)